

派遣者番号	R2J01	氏名	新田 一浩
研究主題 —副主題—	主体的に学習に取り組む態度を養うための小学校社会科の授業づくり —見通しと振り返りの場面を通して—		
派遣先	聖徳大学 大学院	担当教官	萩原 真美
所属	文京区立駕籠町小学校	所属長	矢部 明美

キーワード：主体的に学習に取り組む態度 小学校社会科 見通し 振り返り

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

「主体的に学習に取り組む態度を養う」ことが、小学校学習指導要領（平成29年3月告示）（以下、「学習指導要領」）において明示された。さらに、主体的に学習に取り組む態度を養うために、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が求められ、学習指導要領には、各教科の指導に当たって「見通し」と「振り返り」を計画的に取り入れるように工夫することが明記されていた。

社会科における「主体的に学習に取り組む態度」に関する先行研究を整理したところ、小学校第4学年以上を研究対象としており、特に「見通し」と「振り返り」に着目し、小学校第3学年を対象とした研究は管見の限りない。

以上のことから、本研究では、社会科の開始学年である小学校第3学年を対象に、主体的に学習に取り組む態度を養うための小学校社会科の授業づくりにおける、「見通し」と「振り返り」の意義について検証することとした。

2 研究の方法

(1) 主体的に学習に取り組む態度の定義

国立教育政策研究所「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【小学校社会科】に示されている、「主体的に問題解決しようとする態度」と「よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度」の二つを、主体的に学習に取り組む態度として定義する。本研究では、単元ごとに設定する主体的に学習に取り組む態度の評価規準を具体的な姿とした。

(2) 単元設計・検証授業

ア 授業づくりの視点

授業づくりの視点を3点設定した。第一に、課題把握の段階の工夫である。課題把握では、児童が課題に興味・関心をもち、自己の社会生活と結び付け、学ぶ必要性を感じさせることが重要である。そのために、実生活の中から児童にとって必要性のある課題を設定し、その解決のために見通しをもたせる学習活動を設定する。

第二に、振り返りの設定である。毎時間の授業の終末に振り返りの時間（5分～15分）を位置付ける。振り返る内容は、小学校学習指導要

領解説社会科編（平成29年7月）の指導計画作成上の配慮事項に記載されている以下の4項目とした。

- ①「学習成果を吟味」（理解したことや興味をもったこと、これまでの考えの修正、授業への取り組み方）
- ②「新たな問いを見いだす」（さらに調べたいこと）
- ③「自らの生活を見つめる」（これまでの自分の生活とつなげて考えたこと）
- ④「社会生活に生かす」（これからの生活で生かしたいこと）

また、進んで学習できたかの自己評価とその理由を記載できるようにする。

第三に、教師の働きかけである。発問（調べ方を問う発問、思考を促す発問など）やフィードバック（児童の毎時間の振り返りに対してコメントを記入する）などを行い、一人一人の児童の学習状況を把握し、個々に合わせた支援を行う。

イ 検証授業

2年間にわたり検証授業を実施した。1年目は2020年10月24日～11月16日、2年目は2021年6月14日～7月3日に実施した。対象は、都内公立小学校第3学年2学級とした。小単元「消防の仕事と人々の協力」の授業をすべての学級において筆者が行った。

ウ 教師の働きかけと児童の反応の分析

授業者である筆者の働きかけ（授業設計の意図、発問、指示、フィードバックなど）と児童の反応（発言、振り返りカードなど）を分析し、教師の働きかけが児童にどのように作用したのか考察した。

3 研究の結果

(1) 全児童の振り返りカードの分析

分析を通して明らかとなったことは3点である。第一に、学習計画を立てる際、調べる内容と調べる方法を理解することで、学習の見通しをもち、児童自ら進んで調べ活動をすることができた点である。第二に、児童が主体的な学びをしているかどうかを授業者が見取るためには、振り返り活動

が必要不可欠となることである。第三に、児童が単元の目標を達成するために、授業者が何について振り返るのかを指示する必要がある点である。

(2) ケーススタディー

主体的に学習に取り組む態度がうかがえた特出すべき児童G（以下、「G児」）について報告する。

G児は、自分の生活経験と学習とを結び付け、粘り強く学習に取り組んでいると筆者が捉えた児童である。三つの学習過程（課題把握、課題追究、課題解決）ごとにG児の振り返りカードの記述を中心に述べる。

ア 課題把握の段階

第1時の振り返りには、「道を歩いている、救急車と消防車が走っていて、それらのことを調べてみたくなりました」と記述していた。授業の中で火災現場の動画やイラストを見て、これまでの自分の日常生活の中で目にしてきた消防車などを想起し、興味・関心をもち始めていた。

学習計画を考える第2時では、「消防士などのことをじっくりと今までの経験を思い出して考えられた」と記述していた。これまでの生活経験を想起して、学習と結びつけて考えようとしていることが分かった。

イ 課題追究の段階

第3時では、これまで生活経験から獲得した知識を再構成していると分析できる記述が振り返りに見られた。それは、「動画を見て、今まで人を助けるだけだと思っていた消防士が、たくさん活動をしていることに気付いた。もっと他にやっていることがないか興味をもった」である。消防士の働きについて、これまでG児は、火災の時だけ仕事をする消防士と捉えていた。しかし、日常的に行っている訓練や消防設備の点検などの様子を知り、火災現場の仕事以外に火災に備えた消防士の働きがあることも理解し、消防士に対する捉えの幅が広がっていることが、記述内容から読み取れる。

第7時の課題追究の最後の時間では、学校内の消防設備を調査する活動を行った。振り返りには、「普段、普通に通り過ぎて気付いていなかったいろいろな種類の消防設備を見付けられた」と記述していた。学校内にあり、普段目にしていないはずの消火器などの消防設備に注目していなかった自分のことを客観的に捉えていた。消防設備に着目して学校内を見ると、学校は火災に備え、様々な消防設備があることに気付いていた。

また、これまでの学習の自分の調べ方についての振り返りでは、「動画、本、教科書などよりも実際に聞き、実際に見た方が自分で気付くことができると思いました」と記述していた。このことから、G児は、第4時の消防士から直接話を

聞いたことと、第7時の学校内の消防設備について調査したことで、多くの気付きを得られたと感じている。つまりG児にとって、直接見たり、聞いたりする直接体験が、自分に合った学び方であることを示している。

ウ 課題解決の段階

第8時の振り返りには、「自分の生活と学習をつなげることができた。一度お母さんたちと家の設備について話し合ってみようと思います」と記述していた。このことから、G児は自分の生活と学習をつなげて考えることを意識して、学習に取り組んでいたことがうかがえる。また、家族と家の消防設備について話し合ってみようという表現しており、学習内容を自分事として捉え、生活に生かそうとする態度が表れている。

4 研究の考察

課題把握の段階では、まず、児童が興味・関心をもつような社会的事象に触れることが欠かせない。そのうえで、児童が興味・関心をもった社会的事象から追究する問いを見だし、学習の見通しをもつことができるような支援を授業者が行う必要がある。

課題追究の段階では、学習計画に沿って調べていくうちに、新たな疑問や他の内容についても調べる必要があることに気付くようにすることが重要である。単元のねらいを達成するために、児童が気付かない視点に気付き、学習内容を広げたり深めたりできようすることが授業者の役割の一つである。

課題解決の段階では、学習問題に対する自分の考えをこれまで調べてきた内容を踏まえ、自分でまとめるように促すことが大切である。その際、授業者とのやりとりを通してこれまで調べてきたことをキーワードに整理し、まとめることができるようにする。また、社会への関わり方を選択・判断することが求められる単元では、児童が自分たちにもできることがあると実感できるような学習活動を行い、具体的に自分たちができることを考えられる授業展開にすることが、主体的に学習に取り組む態度を養うための小学校社会科の授業づくりにおいて重要だと考える。

5 今後の展望

本研究では、小学校社会科において主体的に学習に取り組む態度を養うために、粘り強い取組を行おうとする側面は検証することができた。だが、自ら学習を調整しようとする側面については、十分に捉えられず検証には至らなかった。しかし、本研究において自ら学習を調整しようとする児童の姿がわずかにうかがえる振り返りカードの記述が見られた。「一人で調べて戸惑っていたら、友達と話し合う事をするといいと思いました。」である。自ら学習を調整する姿とはどのようなもので、自ら学習を調整する力はどのように養われていくのか等については、今後の課題としたい。